

令和五年清流の国ぎふ 秋の地歌舞伎公演

菅原伝授手習鑑 寺子屋の段

配役

松王丸  
まつおうまる

千代  
ちよ

武部源蔵  
たけへげんぞう

戸浪  
となみ

御台所  
みだいどころ

菅秀才  
かんしゅうさい

小太郎  
こたろう

春藤玄蕃  
しゅんどうげんば

涎くり  
よだれ

三助  
さんすけ

寺子

子迎

捕手

(幕開き)

「一字千金二千金三千世界の宝ぞと、教える人に習う子の、中に交わる菅秀才。武部源蔵夫婦の者、世話をかくとぞ見えにける。中に年がさ五作が息子。

涎くり コレ皆、よう見や。お師匠様の留守の間に手習いするは大きな損。おりや坊主頭の清書した。た。

「見せるは一五のよだれくり、若君はおとなしく。

菅秀才 一日に一字学べば、三百六十字の教え、そんなこと書かずと、本の清書したがよい。

「ハツになる子に叱られて。

涎くり 何やて、お師匠はんの子やおもうて偉そうに言いな。ませよ、ませよ。

寺子一 兄弟子に口ごたえするよだれくり。

寺子二 いがめてこませ。

寺子皆 こませ、こませ……。わあ……。

(戸浪、奥より出る)

戸浪 ああ、そなた、いっち大きいなりをして、そのように諍いをするというものがあるもの

か。さあこつちにきや……。

涎くり 堪忍や、堪忍や……。

戸浪 さあこのうえに立っていや。そうしてな、これを持っていや。お師匠様がお帰りなさるまで、ちやつとそのままでいませうぞ。そんなら皆の者は精出して習うた、習うた。

(戸浪、奥へ入る)

〽男が肩に塚重、文庫机をになわせて、七つばかりの子を連れて。

(千代、小太郎、三助花道より出る)

三助 ハイ、御免くださいやし。竹っぺらの源蔵様のお家はこちらさんでござりまするか。

涎くり 何だ、竹っぺらだ。そんなものは知らんで。

三助 何でも竹っぺらと言いやした……。

涎くり やあ、おっさん、ごちやごちやと言いなや。

三助 せやかて……。

(戸浪、奥より出る)

戸浪 これこれこれ……。そのようなことを言うてはならぬ。そなたはそこより降りてはなら

ぬぞえ。

千代 ちとものをお尋ねいたします。武部源蔵様お宅はこちらさまでござりまするか。

戸浪 いかにも源蔵宅はうちかたでござりまする。どうぞお入りなされませ。

千代 さようなれば、御免なされてくださりませ。

戸浪 どうぞ、どうぞおあがりくださりませ。

千代 これはこれは初めてお目にかかります。私は、この村はずれに、かるう住まいしている者でござりまするが、この度、この悪さをお頼み申しますと、お願い申しましたところ、おこせ、世話してやると、結構なご返事をいただきましたゆえ、さっそく連れて参りましてござりますれば、どうぞお頼み申します。

戸浪 さようでござりましたか。

千代 承りますれば、こちらさまにも御子息様がおありじゃげな。どのお子様でござりまするな。

戸浪 はい、アノすなわちあれにおりますのが、夫、源蔵が跡取りにござりまする。

千代 そんならあのお子様。これはまあ、良いお子様でござりまするな。

戸浪 そうして、そこなお子様のお名は何と申します。

千代 名は小太郎と申します。どうぞよろしゅうお頼み申します。

戸浪 それは良いお名でござりまするな。

千代 ありがとうございます。しばらく……。これ三助、それなる品をこれへ持ちや。

三助 あいあい。

(三助、重箱を出す)

〜あつと答えて塚重、内儀が前に差しい出す

千代 これなる粗品は皆様方へのお土産。また、これは小太郎の寺入りのほんの印ばかり、どうぞお納めなされてくださりませ。

戸浪 これはまあ何から何までご念のいったこと。ありがとうございます。

千代 恥ずかしゅう存じまする。

戸浪 では頂戴いたしまする。

千代 どうぞお納めなされてくださりませ。

戸浪 ありがとうございます。

千代 おそれいりましてござりまする。

戸浪 そんならこれは後に皆の者に分けてやりまする。

涎くり アチーアチアチ・・あちいよー。

千代 あのお子様はどうなされたのでござりまする。

戸浪 あまり悪さが過ぎますので、しつけをいたしておりまする。

千代 まあまあさようでもござりましょうが、今日はこの子の寺入りもあれば、それに免じてどうぞ御堪忍なされてくださりませ。

戸浪 どうぞお構いくださりまするな。

涎くり あちいよー。アチアチアチ・・。

千代 ちよつとごめんくださりませ。これはまあどうしたものじゃ。まあまあ、このおばが詫び言してあげましょうほどに。さ、降りてきや。まあまあ何をしたのじゃ。これはえらいこと。さあさあお鼻をかんで・・。

涎くり ちーん、ちーん。

千代 さあよいか。おとなしゅうしてよう手習いをしましよぞよ。

涎くり アイアイ。

千代 どうぞ今日のところは御堪忍なされてくださりませ。

涎くり お師匠はん、堪忍。

戸浪 ああ、これこれ。おばさまにお礼を申さぬかいなあ。

涎くり おばはん、おおきに。

戸浪 あの通りにござりまする。

千代 ハハ・・・お許しなされてくださりませ。

戸浪 お恥ずかしゅうござりまする。

千代 そうして今日、アノお師匠さまは。

戸浪 折悪しゅう夫源蔵は他行、じきに戻つて参りましようほどに、私がちよつと見てまいりませる。

千代 ああいえ、それには及びませぬ。幸い、隣村まで行かねばならぬ用もござりますればちよつと行て参りまする間、この悪さをお頼み申しまする。

戸浪 よろしゅうござりまする。

千代 コレ小太郎や、母はナ、隣村まで行て来るほどに、おとなしゅうして悪あがきせまいぞや、

よいか、よいな。そんなら御免下さりませ。

戸浪 行つておいでなされませ。

千代 行つて参ります。

〽と表へ出れば。<sup>いず</sup>

小太郎 コレかかさま、わしも一緒に行きたいわいのう。

千代 これはまあ、どうしたものじゃ。うちであれほど言うたでないか。後追うということがあ

るものぞ……。御覧<sup>ごろう</sup>じませ、形<sup>なり</sup>は大きゆうても、まだ頑<sup>がん</sup>是<sup>ぜ</sup>がござりませぬ。

戸浪 お道理でござります。

千代 そんなら御免なされてくださりませ。

戸浪 お早うお戻りくださりませ。

〽後追う子にも引かさる。

戸浪 なんぞお忘れ物でも。

千代 ああいや、どこぞそらに私の扇がござりませぬか。

戸浪 扇でござりまするか。今見て参りますほどにちよつとお待ちくださりませ……。あの

扇はどこにもみえませ……。アアこれはしたり。扇はあなた様のアノお手に。

千代 ほんに私としたことが、扇はここにあるもの。ハハ……。

戸浪 ホホ。

両人 ホホホ……。

千代 さようなれば行て参じます。

〽見返り、急ぎ行く。

戸浪 そんならな、お師匠様がお帰りなさるまで、子供らと奥で待っていましたよ。さあさあ皆も奥へ奥へ。

(戸浪・寺子奥へ。三助は寝ている。涎くりはその場に残り)

涎くり おじさん、おばさん去んだぞ……。なんや、おじさん寝とるがな……。オ、こりやあ

大好物の明宝のハムじゃ……。

おじさん、おばさん去んだぞ……。

コレおじさん、火事じゃ、火事じゃぞ！

三助 ナニ火事。火事はどこじゃ。火事はどこじゃ。

涎くり ハハハ嘘じゃ、嘘じゃ。

三助 なんじゃあ……。

コレそのハム、一つわしによこせ。

涎くり 嫌じゃ。

三助 オイ、それはわしがな、今朝、明宝の気良というところにあるハム工場からもってきたハムやぞ。一つよこせ、サアはよよこせ……。ヤアヤア、涎。

うぬがぶんどるそのハムを、はやくこつちへよこさばよし。嫌じゃなんぞとぬかすが最後、とっ捕まえてきゅ、引っ捕まえてきゅ、きゅうきゅうきゅう、小僧、返事はなんとんと。

「なんとんとと呼ばわったり。涎はふっと吹き出し。」

涎くり おじさん、持ってきたこのハムを。ひとつ、ふたつ、みつつ、よつつ、五六百喰うまでは、やることなんねえ。

「やることなんねと呼ばわったり。」

三助 何をこしやくな、ソレ。

涎くり やったな。

(三助、涎くりやり取り)

「表へ出れば。」

涎くり これかかさま、わしも一緒に行きたいわいのう。

三助 これはまあどうしたものじゃ。御覧じませ、形は大きゅうても、まだ頑是がござりませぬ。

涎くり お道理でござりまする。

三助 そんなら御免なされてくださりませ。

涎くり お早うお戻りなされませ。

「後追う子にも引かさるる」

涎くり なんぞお忘れ物でも。

三助 どこぞそこらに私の天秤棒はござりませぬか。

涎くり 天秤棒でござりまするか。ちよつとお待ちくださりませ……。天秤棒、天秤棒……

天秤棒はどこにも……。アアこれはしたり、天秤棒はあなたのお腰に。

三助 ほんにまあ私としたことが天秤棒はこれにあるものを。ホホ。

涎くり ホホ。

三助 ホホ。

両人 ホホホ・・・。

三助 さようなれば行て参じます。

〽見返り、急ぎ行く。

涎くり ア、お師匠はんが帰ってきた・・・。皆、お師匠はんが帰ってきたぞ、習え習え。

(寺子、奥から出る)

涎くり いろはに。

寺子皆 ほへと。

〽立ち帰る主あるじの源蔵、常とこに変わかりて色青いろあざざめ、内入うちいりり悪く子供こどもを見まわし。

涎くり お師匠はん。

寺子皆 お帰り。

源蔵うじ 氏うぢより育うちちというに、繁華はんかの地ちと違ちがい、いずれを見ても山家やまがそだち、役やくに立たたず。習え、

習え。

〽と思おもいありげに見えければ、心こころならずも女房にようぼう立たち寄より。

戸浪 お帰りなされませ。いつにない顔色も悪し。振舞いの酒機嫌ささきげんかは知らねども、山家やまが育ちは知れてある子ども、憎態にくてい口は聞こえも悪い。ことに今日は約束の子が寺入りしております。性さがない人と思うも気の毒、機嫌直して逢うてやっってくださいませ。

〽小太郎連れて引き合わせど、差しうつむいて思案しあんの体てい。いたいけに手をつかえ。

小太郎 お師匠様、今からお頼み申します。

〽いうに思わず振り仰向きあおむ、きつと見るよりしばらくは、打ち守りいたりしが、たちまち面色めんしよくや

わらざ

源蔵 器量きりよう勝れて気高けだかき生まれつき、公家高家の御息くげこうけ ごしそくというても、おそらくは恥ずかしからず。ハテサテそなたは、ウンウン、マ良い子じやのう。

〽機嫌直れば女房も。

戸浪 何とよい子、よい弟子でござんしよかな。

源蔵 よいとも、よいとも上々じょうじょう吉きち。シテ連れて見えた母御ははごはいずれに。

戸浪 お前が留守ならその暇ひまに、隣村まで行てこというて。

源蔵 それもよし、よし。大極上だいごくじょう。今日寺入りの事なれば、奥で子供らと機嫌よう遊ばしめさ

れ。

戸浪 ソレ皆、お暇ひまが出た。小太郎もともに奥へ奥へ。

寺子皆 サア遊ぼう、遊ぼう。

〽若君もろとも誘いざなわせ。後先見まわし夫に向かい。

戸浪 最前の顔色は常ならぬ血相、合点ゆかぬと思うたに、今またあの子を見て打ってかえての機嫌顔きげんがお。なおもって合点がてんゆかず。どうやら様子がありそうな、気遣いな、様子聞かせてくださんせいなあ。

〽問えば源蔵。

源蔵 気遣きづかいなはず。今日村こんにちのもてなしと偽り、それがしを庄屋方しよやかたに呼びつけ、時平しへいの家来春藤の役とみえ、数百人すひやくにんにて追っ取り巻き、汝なんじが方に菅丞相かんしようじようの一子菅秀才いっし、我が子として匿かくまうよし、訴人そにんあつて明白。急ぎ首討いつて渡すや否や、ただし踏ん込み受け取ろうや、返答いかにと、サのつぴきならぬ手詰めてづ。是非ぜひに及ばず、首討いつて渡そう、とサ請うけ負おうた心はな。数多あまたある寺子のうち、いづれなりとも御身替おみがわり、思おもうて帰る道すがら、あれか、

イヤこれかと指折っても、玉簾たまだれのうちのご誕生と、菰こもだれの中で育ったとは、似ても似つかず。所詮しよせんごうん御運すえの末なるか、おいたわしや、あさましやと、屠所としよの歩みで帰りきて、今またあの寺入りの子を見たれば、まんざら鳥からすを鷲さぎともいわれぬ器量きりよう。一旦は御身替おみがわりにてあざむき、この場のさえ逃れたれば、すぐに河内かわちへ御供おんともする所存しよぞん。今しばらくが大事の場所。

語れば女房。

戸浪 待たんせいや。その松王というやつは、三つ子のうちの悪者。若君の顔、よう見知つていまして、ましようぞいのう。

源蔵 ササ、そこが一かばちか。生顔いきがおと死顔しにがおは相好そうごうの変わるもの。面差おもぢし似たる小太郎が首、よもや偽にせとは思にうまい。よしまたそれと頭あらかれなば、松王めを真つ二つ、残る奴輩やつばら切つて捨て、叶わぬ時は若君もろとも死出しでさんず三途の御供おんともと、胸すを据えたが一つの難儀なんぎ、今にもあの小太郎が母親、迎えに来たらば何とせん。

戸浪 その事きづかなら気遣おなごどしいあるなな。女子同士の口先くちさきで、ちよぼくさ騙だましてみましようぞ。

源蔵 イヤその手ではゆくまい。大事だいじは小事しよじより頭あわるる、ことによつたら母もろとも。

戸浪 エエ。

源 蔵 コリヤ、若君には替えられまい。

〽いうに胸すえ。

戸 浪 そうでござんす。気弱<sup>きよ</sup>うては仕損<sup>しそん</sup>ぜん。鬼になつて。

〽と夫婦はつつ立ち、互いに顔を見合わせて。

源 蔵 弟子<sup>でしこ</sup>子といえば我が子も同然。

戸 浪 今日に限って寺入りした、あの子が業<sup>ごう</sup>か、母御<sup>ははご</sup>の因果<sup>いんが</sup>か。

源 蔵 報<sup>むく</sup>いはこつちが火の車。

戸 浪 追っ付け廻<sup>まわ</sup>つてきましようぞいなあ。

〽妻<sup>なげ</sup>が歎<sup>なげ</sup>けば夫も目をすり。

〽せまじきものは宮仕え。ともに涙にくれいたる。一間のうちへ。

〽かかる所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸。病苦<sup>びょうく</sup>をたすくる駕籠<sup>かご</sup>乗りもの、門口にかきすゆれば、

後には大勢<sup>おほせい</sup>村の者つき従<sup>ま</sup>つて。

子迎一 お願いにござります。これにおります者の子は、皆<sup>みな</sup>手習<sup>てなひ</sup>に参<sup>ま</sup>つております。

子迎二 もし取り違えて首討たれましたは、取り返しがなりません。

子迎三　よくよくお改あらためなされたうえ。

子迎四　お戻しなされてくださるよう。

子迎皆　へいへい、お願いでござりまする。

〽願えば玄蕃。

玄蕃　かしましい、はえ虫めら。うぬらががきの事までも、身どもが知ったことか。勝手次第に連れうしよう。

〽と叱りつけければ松王丸。

松王丸　ヤレお待ちなされ。玄蕃殿。

〽駕籠かごより出るも刀を杖。

松王丸　はばか 憚りながら彼等かれらとても油断はならぬ。病中ながら拙者せっしゃめが検分けんぶんの役勤つとむむるも、ほかに菅

秀才しゅうせいの顔見知りしもの無きゆえ。今日の役目仕終しおうすれば、病身びょうしんの願いお暇いとまくださるべしと有り難ごんごんき御意ごいの趣おもむき、おろそかには致いたされず。菅丞相かんしょうじょうの所縁ゆかりの者、この村に置おくからは、百姓ひやくしやうどもとぐるになつて、めいめいが倅せがれに仕立したて、たすけて帰る手もあること。コリヤやい百姓ひやくしやうめら、ざわざわとぬかさずとも、一人いちにんずつ呼び出いだし、面改つらめめて戻かへして

りよう。

「のっぴきさせぬ釘くぎかすがい、打てばひびけの内には夫婦、兼ねて覚悟も今更に、胸とどろかすばかりなり。表はそれとも白髪のおやじ、門口より声高に。」

子迎一 長松よ、長松よ。  
ちやうまつま ちやうまつま

「と呼び出せば。」

長松 アイ。

「あつと答えて出で来るは、わんぱく顔に墨べったり。似ても似つかぬ雪と墨、これではないとゆるしやる。」

子迎二 岩松はいぬか。  
いわまつ

「と呼ぶ声に。」

岩松 じさま、なんじゃ。

「じさまなんじゃとはしごくで、出で来る子供の頑がんぜ是なき、顔は丸顔木みしり茄子。」

「詮議せんぎに及ばぬ、連れうしようと、にらみ付けられ。」

子迎二 オオこわや。嫁にも食わさぬこの孫を、命の花落ち、逃のがれました。

「じいじが抱えて走りゆく。次は十五のよだれくり。」

子迎三 ぼんよぼんよ。

「と親父が手招き」

涎くり ジャン、ジャン……。オ父か、とと迎えにきてくれたんか。今いくさかいな、ちよつと

待っててや。今な、おもしろい遊びしてたんやで……。ウワアー。

子迎三 オオどないしたのや。

涎くり あの赤い顔したおっちゃん、ぼんの頭テンテンしよった。

子迎三 あのお方は、えらいお侍さんや、堪忍せい、堪忍せい。はよいこ、はよいこ。

涎くり 父よ、ととおりやもこつから抱かれて去いのう。

「あまえる顔は馬顔で、声きりぎりす。泣くな抱いてやると干から鮭を、猫撫ねこなで親が。」

涎くり 父よ、とと泣きなや。

子迎三 孝行な子やな。

「くわえゆく。」

子迎四 私のせがれ倅きりょうは器量よし、お見違いくださりまするな。

「断りいうて呼び出すは、色白々と瓜実顔、こいつうろんとひつとらえ、見れば首筋真黒々、墨かあざかは知らねども、こいつでないとききはなす。その外山家奥在所の、子供残らず呼び出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が生ませたはかり芋、子ばかりよって立ち帰る。」

玄 蕃 いざ、松王丸。

松王丸 まずまず。

「すは身の上と源蔵も、妻の戸浪も胸をすえ、待つ間ほどなく、入り来る兩人。」

玄 蕃 ヤイ源蔵、最前玄蕃が目の前で、討つて渡そと請け負うた、菅秀才が首、いざ受け取ろう。

「と手詰めの催促、ちつとも臆せず。」

源 蔵 仮初めならぬ右大臣の若君、かき首捻じ首にもいたされず、しばらくのご容赦。

「と立ち上がるを。」

松王丸 イヤその手はくわぬ。しばしの容赦と暇取らせ、逃げ支度いたいてもな、裏道へは数百人をつけおき、蟻の這い出るところもない。また、生顔と死顔は相好の変わるなどと、身替りの偽首、それもたべぬ。古手なこととして後悔すな。

「いわれてぐっとせきあげ。」

源 蔵 いらざる馬鹿念。病み呆けた汝の目玉がでんぐり返り、逆さま眼で見ようは知らず、ま  
ぎれもなき菅秀才の御首、追っ付け見しよう。

松王丸 その舌の根の乾かぬうち、早く討て。

玄 蕃 疾く切れ。

〽と玄蕃が権柄。

源 蔵 ハハッ。

〽はつとばかりに源蔵は、胸をすえて入りにける。そばに聞き入る女房は、ここぞ大事と心も

空。検使は四方八方にまなこを配る。中にも松王、机文庫の数を見まわし。

松王丸 ハテ心得ぬ。先だつて去んだがきは以上八人、机の数が一脚多い。その倅はどこに居る。

〽見咎められて戸浪ははつと。

戸 浪 最前寺入りした……。

松王丸 何を馬鹿な。

戸 浪 オオそれそれ、これがすなわち菅秀才さまのお机文庫。

〽木地を隠した塗り机、ざつと捌いて言い抜ける。

松王丸 何にもせよ、暇ひまどらすは油断のもと。

玄 蕃 実げにもつとも。

「玄蕃もろともつつ立ちあがる。こなたは手詰てづめ、命せとぎわの瀬戸際。奥にはばったり首討くびおけつ音。はつと女房胸を抱き、踏ん込む足も。」

松王丸 無礼者め。

「けしとむうち。武部源蔵一間より、首桶くびおけたずさえしずしず出で、目通りに差し置き。」

源 蔵 是非ぜひに及ばず、菅秀才の御首おんくび討たてまつち奉る。いわば大切なる御首おんくび、性根しょうねをすえて松王丸、しつかりと検分けんぶんせよ。

「しのびの鰐元つばもとくつろげて、虚きよといわば切りつけん、実じつといわば助けんと、固唾かたずをのんで控え居る。」

松王丸 ナニこれしきに性根しょうねどころか、今浄玻璃じょうはりの鏡かがみにかけ、鉄札てつさつか。

玄 蕃 金札きんさつか。

松王丸 地獄。

玄 蕃 極楽の境。

松王丸 家来衆、源蔵夫婦を取り巻きめされ。

捕手 ハハ。

「かしまつたと捕手の人数、十手ふって立ちかかる。

捕手 動くな。

「女房戸浪も身をかため、夫は元より一生懸命。

源蔵 実検せよ。

「いう一言も命がけ、後ろは捕手、向こうは曲者、玄蕃は始終まなこを配り、ここぞ絶対絶命と

思う内はや首桶引き寄せ、ふた引きあげた首は小太郎、偽というたら一討ちと、はや抜きかけ

る。戸浪は祈願、天道さま仏神さま、あわれみ給えと女の念力。眼力光らす松王が、ためつす

がめつ窺い見て。

松王丸 若君、菅秀才の首に、相違ない、相違ござらん。でかした源蔵よく討ったな。

「いうにびっくり源蔵夫婦あたりきよるきよる見合わせたり。検使の玄蕃は検分のことば証拠に。

玄蕃 でかした源蔵よく討った。褒美には匿うた咎ゆるしてくりよう。イザ松王丸、片時も早

く時平公へお目にかけん。

松王丸 いかさま、暇ひまどつてはお咎とがめもいかが、拙者せつしやはこれよりお暇いとまたまわり、病氣びようき保養ほようないた  
したし。

玄蕃 役目はすんだ、勝手次第。

松王丸 しからば御免ごめん。

〽と松王は駕籠かこにゆられて立ち帰る。

玄蕃 ヤイ源蔵、それへ出でい。日頃は忠義忠義と口では言えど、うぬが体に火がつけば、主しゆうの  
首をも討つじやまで。ハテサテ命は惜しいものだなあ、ハハハ。

〽玄蕃は館へ立ち帰る。

〽五色の息を一時に、ほっと吹き出すばかりなり。胸撫でおろし源蔵は、天を拝し地を拝し。

源蔵 ありがたや忝かたじけなや。凡人ぼんじんならぬ我が君の御聖徳ごせいとくあらわれて、松王めが眼まなこかすみ、若君

と見定めて帰りしは、天成てんせい不思議のなすところ。ご寿命じゆみようは万々歳ばんばんせい、コレよろこべ女房にようぼう。

戸浪 イヤもうこりや、大抵のことじやござんせぬ。あの松王めが目の玉へ丞相しやうじやう様が入つてご

ざったか、ただしは首が黄金おうこん仏ではなかつたか。似たおつといつても瓦かわらと黄金こがね、宝の花ごうんの御運ごうん  
開ひらきとは嬉おひしゆうて嬉おひしゆうて涙がこぼれるわいなあ。

「ありがたや尊とうとやと、悦よろこびいさむ折しからに、小太郎が母息せきと、迎いとみえて門の戸たたき。

千代 モシどうぞここをお開けなされてくださりませ。私は最前寺入りの子の母でござりまする。

源蔵 しばらく、しばらく。

千代 ただ今戻りましてござりまする。

源蔵 ただいま、ただいま開けまする。しばらく、しばらく……。

千代 申しお開けなされてくださりませ。

千代 私は最前寺入りの子の母でござりまする。

源蔵 まずお通りくださいませ。

千代 ごめんくださりませ。

源蔵 手前てまえが武部源蔵でござりまする。

千代 左様さようなら貴方あなたさま様が御師匠様でござりまするか。最前は悪さをお頼み申しまして、いかい

御世話おせわでござりまする。シテ小太郎はどこにおりまする。

源蔵 小太郎は奥で子供らと機嫌よう遊んでおりまする。

千代 小太郎が奥で遊んでおりまするか。アノ奥で……。左様でござりまするか。いこう日も

長たけましたれば連れて戻りましても大事ござりませぬか。

源 蔵 いかようとも、お心まかせに。

千 代 ごめんくださりませ……。小太郎や、小太郎や。

源 蔵 ハハ……。。

千 代 ホホ……。。

両 人 ハハハ……。。

千 代 左さ様なれば連れて帰りましょう。

「ずっと通るを後ろより

源 蔵 覚悟。

「ただ一討ちと切りかかる、女も痴しれもの引はっ外はずし、逃げても逃がさぬ源蔵が、刃鋭く切りつけるを、我が子の文庫ではっしとうけとめ。

千 代 若君菅秀才の御身おみ替がわり、お役に立ててくださったか、ただしは未まだか。サアサアサア……  
様子が聞きたい。

「言うにびっくり。

源 蔵 シテシテそれは得心か。とくしん

千代 アイ得心なりやこそ、とくしん 経帷子きょうかたびらに六字の旗。

源 蔵 シテシテそこもとは何人なんびとの御内証ごないしよ。

〽尋ぬる内に門口より。

源 蔵 梅は飛び桜は枯るる世の中に。

松王丸 何とて松のつれなかるらん。にようぼうよろこ 女房悦せがれべ、倅せがれはお役に立たるぞ。

源 蔵 おのれ松王。

松王丸 源蔵殿、先刻は段々。

〽夢かうつつか夫婦かと、あきれて言葉もなかりしが、いぎ 武部源蔵威儀いぎを正し。

源 蔵 一礼いちれいはまず後の事、かたき これまで敵かたきと思ひし松王、しよぞん うつて変わりし所存しよぞんはいかに。

〽と尋ねれば。

松王丸 その御不審ごふしんもつとも。ぞんじ 存知のとおり我々兄弟三人、ごほうこう めいめい別れて御奉公。情けなやこの

松王、しへいこう 時平公しへいこうに従ひ親兄弟とも肉縁切り、ごおん 御恩を受けし丞相ごおん様に敵対。しゅうめい 主命しゅうめいとは言い

ながら、みな これ皆この身の因果いんが。なにとぞ主従の縁切らんと、さくびようかま 作病構さくびようかまえ暇いとまの願ひ。菅秀

才の首見たらば暇いとまやらんと今日の役目ごんちち やくめ。よもや、よもや貴殿きでんは討ちはせまい、なれども  
身替りに立つべき一子いっしなくばいかがせん。ここぞ御恩ごおんを報ほうずる時と、女房千代にようぼうと言い合  
わせ、二人が仲なかの倅せがれをば、先へまわして御身替りおみがわ。最前さいぜん、机この数を改あらためしも、我が子は  
来たかおんうたと心のめど。丞相様しょうじょうさまには我が性根しょうねを見込み給たまい、何とて松のつれなおんうたかるうぞとの  
御歌おんうた。松はつれない、つれないと世上せじょうの口くちに。

〽かかる悔しき。

松王丸すいりょう 推量すいりょうあれや源蔵殿げんざう。倅せがれがなくばいつまでも、人でなしと言われんに、アア持つべきもの  
は子でござる。

〽言うに女房なおせきあげ。

千代 持つべきものは子なりとは、あの子のためには良い手向たむけ。思えば最前別れた時、いつに  
ない跡追うたを、叱った時のその悲しき。冥途めいどの旅へ寺入りと、はや虫が知らせてか、隣  
村まで行てこと言うて、道まで去いんでみたれども、子を殺させにおこしておいて、どうま  
あ家うちへ去いなるるものぞいの。死顔しがおなりともま一度見たさに、モシ。

〽未練と笑うてくださんすな。包みし祝儀はあの子が香典、四十九日の蒸し物まで持って寺入り

さすという悲しいことが世にあるうか。

千代 育ちも生まれも賤しくば殺す心もあるまいに。

〽死ぬる子は見目よしと、美しう生まれたが、可愛いやその身の不仕合わせ。

千代 何の因果で瘡瘡まで。

〽仕舞うた事じゃとせきあげて、かっぱと伏して泣きければ、ともに悲しむ戸浪は立ちより。

戸浪 最前連れ合いが、御身替りと思いついた傍へいて、御師匠様今からお頼み申しますと、言

うた時のこと思ひ出せば、他人のわしさえ骨身が砕くる。親御の身では御道理でござりま  
する。

〽涙添ゆれば

松王丸 イヤ御内証、必ずお歎きくださるな。こりや女房、何をほえる。覚悟した御身替り、家で

存分ほえたでないか。ご夫婦の手前もあること。泣くな、泣くな、泣くなと申すに。イヤ  
なに源蔵殿、申し付けてはおこしましたなれど、定めて最後の節は、未練な死をいたした  
でござろうな。

源蔵 イヤ、若君菅秀才の御身替りと言ひ聞かすれば、潔う首さしのべて。

松王丸 エ、すりやアノ、逃げ隠れもいたさずにか。

源 蔵 につこりと笑うて。

松王丸 笑いましたか。アノ笑いましたか。コレ笑うたといや。ハハ・フフ・ハハハ・。

でかしおりました、利口なやつ立派なやつ、健気な八つや九つで、親に代わって恩送り、

お役に立つは孝行者、手柄者と思うにつけ。

〽️ 思い出すは桜丸。

松王丸 御恩を送らず先立ちし、さぞや草葉の陰よりも、羨ましかろう、けなりかろう。倅がこ

とを思うにつけ、桜丸が不憫でござる。不憫でござる。桜丸が、桜丸……。源蔵殿、御免

くだされ。

〽️ さすが同腹同性を忘れかねたる悲歎の涙。

千代 その叔父御には小太郎が。

〽️ 逢いますわいのと取りついて、わっとばかりに泣き沈む。歎きも洩れて菅秀才、一間のうちよ

り立ち出で給い。

菅秀才 我に代わると知るならば、この悲しみはさすまいに。不憫なものや。

御袖を絞り給えば、夫婦ははつと、ともに浸する有り難涙。

松王丸 おそれながら若君へ、松王が御土産。

松王つつ立ち

はつと答えて家来ども。御目通りにかき据ゆる。早御出でと戸を開けば菅丞相の御台所。

御台所 菅秀才か。

菅秀才 母さまか。

御親子不思議のご対面。源蔵夫婦横手を打ち。

源蔵 所々方々と御行方を訪ねしに、いずかたに御座なれしぞ。

松王丸 さればされば北嵯峨の御隠れ家、時平の家来が聞き出だし召し捕りに向うと聞き、それが

し山伏と姿を替え、危うきところをお救い申したり。急ぎ河内の国へ御供あつて、姫君に

もご対面。こりや女房、小太郎が死骸、あの乗り物に移し入れ、野辺の送りを営まん。

千代 アイ。

あいと返事のそのうちに、戸浪が心得抱いてくる。死骸を網代の乗り物へ、乗せて夫婦が上着

をとれば、哀れ内より覚悟の用意、下に白無垢麻上下。心を察して源蔵夫婦。

源 蔵 野辺のべの送りを親の身で、子を送る法はなし。われわれ夫婦が代わり申さん。

松王丸 イヤ我が子にあらず。菅秀才の御亡骸おんなきがらを御供申す。いづれもには門火かどび、門火かどび。

門火を頼み頼まるる。御台みだい若君もるとともに、しゃくりあげたる御涙おんなみだ。冥途めいどの旅へ寺入りの師

匠みだぶつは弥陀物しやかむにぶつ、釈迦牟尼仏ろくどうのうげ、六道能化の弟子となり、賽さいの河原で砂手本、いろは書く子はあえな

くも、散りぬる命是非もなや。あすの夜誰か添え乳ぢせん、らむ憂うい目め見る親心。剣つるぎと死出しでの

山かどびけこえ、あさき夢見し心地して、後は門火にえひもせず、京は故郷と立ち別れ、鳥辺野とりべのさし

て立ち帰る。

(幕)